【優秀賞】あいテレビ賞

「人権と共生社会について」

三津浜中学校　３年　渡部　泰成

　何気なくニュースを見ていた時、「旧優生保護法のもと、不妊手術を強制された障がい者たちが国に賠償を求めた裁判の最高裁判決が言い渡されました。」という言葉が、耳に飛び込んできた。私ははっとした。なぜなら、私は、幼少期に障がい者手帳を持っていたからだ。もし、私が昔に生まれていれば、不妊手術を受けさせられていたと思うと、ぞっとする。

　子どもの頃は、障がい者割引を使って、遊園地や動物園に行くことが多くあった。まだ幼かったので、障がい者の意味も分からず、自分のおかげで安く入場することができると認識していた。保育園や幼稚園、小学校に入る前には、両親が園や学校に行き、自分の障がいについて先生たちに説明していたことを最近知った。両親は、障がいがあることでみんなに迷惑をかけたり、いじめられたりするのではないかと心配していたそうだ。

　私は、左足の股関節が外れており、また、左足に麻痺があった。両親が生まれてきた私のお尻を見て形が違うことに気付き、病院で診察してもらい、この事実が分かった。二歳になる前に滋賀県の病院で診察してもらうことになった。すると、病院の先生から、

「早いうちに手術をしたほうがいい。三歳になる前に手術をしましょう。」

と言われ、二歳の十二月に手術をすることになった。どんな手術をしたのか、私の記憶にはないが、母親に聞くと何時間もかかる大手術で、手術後も両足を固定した状態で二か月間ギプスをした生活を送っていた。両親は今でも、

「あの時のことは一生忘れない。よく二か月間動けないのに頑張ったね。」

と言ってくれる。多分両親はその二か月が大変だったのだろうと推測すること

ができる。

　では、健常者と障がい者では何が違うのだろう。私は、三歳からリハビリのために、毎週、祖母が水泳に連れて行ってくれていた。水中ではこけないので、楽しく通うことができた。陸上では、同級生に追いつけなくても、水中なら同級生と同じように泳ぐことができた。それがうれしくて、水泳にのめり込むようになり、今では、週六日選手コースに入って泳いでいる。今年の愛媛県総合体育大会では、一五〇〇メートル自由形で愛媛県二位になり、四国大会にも出場することができた。水泳ならば、健常者と同じかまたはそれ以上に泳げる自信がある。

　また、小学校二年生から、持久走大会に向けて、家族で持久走の練習をしている。二・三年生では六位、四年生では三位になり、五年生では一位になることができた。六年生はコロナのため大会が中止になったが、練習では一位だった。中学でも陸上部に入り、駅伝の選手にも選ばれた。水泳によって、麻痺のある左足にも筋力がつき、こけずに走ることができるようになった。このことから、障がい者であっても、自分の障がいの特性を知ることで、健常者と同じように活動することができる。

　現代は、共生社会であると言われる。共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会のことを指している。実際に障がい者雇用促進法でも、従業員が一定数以上の事業主は障がい者の割合を「法定雇用率」以上にする義務がある。これは、強制的に障がい者を雇う必要があるということだ。一般的に障がい者とは、みんなと違う特性をもった人で、人の助けがないと上手に生活できないという風潮がある。確かに障がい者手帳にも級があり、級が上になるほど障がいの程度が重くなる。障がい者を見かけると、かわいそうという目で見ている人が多くいるのも事実だ。しかし、私のように自分の特性に気付き、健常者と同じように生活している障がい者も多くいるのも事実だ。それぞれの特性を生かせる

企業と障がい者をつなぐ架け橋がもっと必要だ。

アメリカでは、自閉症の人を企業が多く雇っているという記事を見たことがある。特に、IT 企業では、積極的に雇用している。自閉症の人は、健常者と違い一つのことにのめり込む特性がある。プログラミングなどの作業では、健常者より優れた能力を発揮するとも書かれていた。しかし、日本ではそこまで、自閉症に対する理解は進んでいないように感じる。アメリカのように、障がい者の特性を理解し、それを生かした企業経営ができて、初めて共生社会が実現していると言える。

まだまだ、日本ではこの考えが浸透していないが、障がい者をかわいそうという見方から、素晴らしい特性をもった人材と思ってもらえる未来になるために、自分が経験し、克服してきたことを、この先、共生社会の実現に役立てていきたい。